

第四十節の隠された歴史——第十五号

第二の災い — その二

Jeff Pippenger

2026-06-11

ホワイト姉妹は、イエスがナザレの会堂で朗読されたイザヤ書の一節が、単に主の働きを告げたのみならず、私たちの働きをも予表していたことを、幾度も述べている。その油注がれた働きの完全な成就是、十四万四千人の旗印を構成する者たちによって達成される。

主なる神の霊がわたしの上にある。主が、柔和な者たちに良き知らせを告げ知らせるために、わたしに油を注がれたからである。主はわたしを遣わして、心の打ち砕かれた者を包み、捕らわれ人に解放を告げ、縛られている者に牢の開放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日とを告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンで悲しむ者たちに備えを与え、灰に代えて冠を、悲しみに代えて喜びの油を、沈んだ霊に代えて賛美の衣を与えさせるためである。こうして彼らは義の樅の木、主がその栄光を現されるために植えられたものと呼ばれる。彼らは昔の廃墟を築き直し、先の荒廃を建て起こし、代々にわたって荒れ果てた荒れすたれた町々を修復する。異邦の者たちは立ってあなたがたの羊の群れを養い、異国の民の子らはあなたがたの耕作者、またぶどうを作る者となる。しかし、あなたがたは主の祭司と呼ばれ、人々はあなたがたをわれわれの神の奉仕者と呼ぶ。あなたがたは異邦人の富を食らい、その栄光をもって自らを誇る。あなたがたの恥に代えて二倍の分があり、辱めに代えて彼らは自分たちの受ける分を喜ぶ。それゆえ、彼らはその地で二倍のものを所有し、とこしえの喜びが彼らのものとなる。イザヤ 61:1-7。

前回の記事において、私たちは、三百九十一年十五日から成るその時の預言を構成している「時、月、日、年」を特定し始めた。もはや時はないので、これら四つの時の表現は、第一および第二の災いの預言的特質が第三の災いにおいて繰り返される終わりの時代に、象徴的に適用されなければならない。「年」とは「主の恵みの年」であり、またそれは「われわれの神の復讐の日」でもある。

「その日」とは、モーセによって示されたとおりに、「災いの日」、報復と復讐の日である。

復讐と報復とはわたしのものである。定めの際に彼らの足は滑る。彼らの災いの日は近く、彼らに臨むことは速やかに来る。申命記 32:35。

イザヤ書において、それは「恵みの年」と「復讐の日」であり、またその復讐の日は、ラオデキヤの足が滑り、彼らが報復と復讐とを受けるときの、モーセのいう「災いの日」である。大地震の時、災いの日、恵みの年、そして第一の月は、すべて日曜法と一致している。ヨエル書における「月」という語は付加された語であるが、その付加語は正しい。翻訳者たちは、後の雨が第一の月に来たという真理に一致して、「月」という語を付け加えたのである。

シオンの子らよ、そのゆえに喜べ。あなたがたの神、主にあって楽しみ。主はあなたがたに適度に先の雨を与え、またあなたがたのために雨を降らせられる。すなわち、先の雨と後の雨を、第一の月に。ヨエル2:23.

「month（暦月）」という語は解釈であって、靈感を受けた原文の一部ではない。ヘブライ語はただ、雨が「初めに」あるいは「初めのように」来ると述べているにすぎない—すなわち、神は昔の時のように、雨をその正しい季節に回復されるという意味である。ホワイト姉妹は、1840年から1844年のミラー派運動を五旬節と繰り返し対応させ、終わりの日における後の雨を描写している。後の雨は「初めのように」来るのであり、その初めとは五旬節であり、ホワイト姉妹はこれを日曜日法と繰り返し対応させている。

「第三天使の使命の宣布においてこれと結び合わされる天使は、その栄光をもって全地を照らすのである。ここには、全世界的な広がり、かつてない力とを伴う働きが予告されている。1840年から44年の再臨運動は、神の力の栄光ある顕現であった。第一天使の使命は世界のあらゆる伝道地にまで伝えられ、いくつかの国々においては、十六世紀の宗教改革以来いかなる地でも見られたことのないほどの最大の宗教的関心が呼び起こされた。しかし、これらさえも、第三天使の最後の警告のもとに起こる力強い運動によって凌駕されるのである。」

「その働きは、ペンテコステの日のそれに類似したものとなるであろう。『前の雨』が、福音の開始における聖霊の注ぎによって、尊い種が芽生えるように与えられたように、『後の雨』もまた、その終わりにおいて、収穫を熟させるために与えられるであろう。『われらは主を知ることの追い求めるならば、ついに知るに至る。主の現れは暁のように確かに備えられている。主は雨のように、地を潤す後の雨と前の雨のように、われらに臨まれる。』ホセア6:3。『シオンの子らよ、それゆえ喜べ。あなたがたの神、主によって楽しみ。主はあなたがたに前の雨を程よく与え、また前の雨と後の雨を、あなたがたのために降らせてくださる。』ヨエル2:23。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての肉なる者に注ぐ。』『主の名を呼び求める者はみな、救われる。』使徒2:17, 21。」

「福音の大いなる働きは、その開始を特徴づけた神の力の現れよりも乏しい現れをもって終わるのではない。福音の開始において、前の雨の注ぎによって成就した預言は、その終結において、後の雨において再び成就されるのである。ここに、使徒ペテロが次のように語ったときに待ち望んでいた『慰めの時』がある。『だから、悔い改めて立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られ、主の御前から慰めの時が来て、主はあなたがたのために、前もって定めておられたキリスト・イエスを遣わしてくださる。』使徒3:19, 20。」『各時代の争闘』611頁。

ペンテコステは福音の働きの「開始」または「初め」であり、「終結」における後の雨はその「終わり」である。最初のもは最後のものを表している。第一の月は、日曜日法における聖霊の注ぎを示している。

「私たちのうちだれ一人として、その品性にただ一つのしみ、あるいは汚点でも残っているかぎり、神の印を受けることは決してない。私たちには、自らの品性の欠点を正し、魂の神殿からあらゆる汚れを清め去ることが委ねられている。そのとき、ちょうど初代の雨がペンテコステの日に弟子たちの上に降ったように、後の雨が私たちの

上にも降るであろう. …」

「兄弟たちよ、あなたがたは備えの大いなる働きにおいて何をしているのか. 世と結びついている者たちは、この世の型を受け、獣の刻印を受ける備えをしている. 自己を頼みとせず、神の前にへりくだり、真理に従うことによって自らの魂を清めている者たち、これらの者は天の型を受け、その額に神の印を受ける備えをしている. 布告が発せられ、その刻印が押されるとき、彼らの品性は永遠にわたって純潔で汚れのないままにとどまるであろう.」『教会への証』第5巻、214、216頁.

最初の「月」は日曜法であり、大地震の「時」は日曜法であり、災厄、報復、復讐の「日」は日曜法であり、受け入れられる「年」もまた日曜法である. 第一の禍いの預言における百五十年は日曜法において終結し、そこで三百九十一年と十五日が始まる.

ラッパを持つ第六の御使いに向かって、こう言った. 「大河ユーフラテスに縛られている四人の御使いを解き放て.」すると、時と日と月と年とのために備えられ、人類の三分之一を殺すように定められていたその四人の御使いが解き放たれた. 黙示録 9:14, 15.

「大河ユーフラテスに繋がれていた」「四人の御使い」は、日曜法の時に「解き放たれる」. 彼らは、第二の災いにおいて人々の三分之一を殺すために、その時、日、月、年のために、預言的に「備えられて」いたのである. 合衆国は、日曜法において聖書の預言における第六の王国として滅ぼされ、また合衆国は、日曜法において樹立される三重の結合の三分之一でもある. 第二の災いは、ちょうど第二の天使が第三の天使のうちに繰り返されるのと同様に、第三の災いの中で繰り返される.

その四つの風は9/11に解き放たれ、十四万四千人への印が押されることの始まりを画し、そしてその直後に抑えられた. イザヤ六十一章に示される、嘆き悲しむ者たちが慰められる時、彼らは日曜法の時における慰め主の完全な注ぎ出しによって慰められるのであり、それはまた大地震の「時」でもある. 恵みの年に嘆き悲しむ者たちは、神の印を受けるエゼキエル九章において嘆き悲しんでいる者たちと、まさに同じ人々である. イエスはイザヤ六十一章を引用してその働きを始められたが、シスター・ホワイトは主のその宣言を私たちの働きと一致させている.

キリストは、ナザレの会堂においてイザヤの預言を朗読されたとき、ご自身の使命を世に宣言された. 『主の御霊がわたしの上にある. 主が、貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしに油を注がれたからである. 主は、心の傷ついた者をいやし、捕らわれ人に解放を、盲人に視力の回復を告げ、しいたげられている者を自由にし、主の受け入れられる年を宣べ伝えさせるために、わたしを遣わされた.』何という働きがその御前にあったことであろうか. —すなわち、主の受け入れられる年を宣べ伝えることである. この期間は、時代また時代を包み、世紀から世紀へと及び、恩恵期間の続くかぎり存続する. 神は、願い求める声とたたき音を聞こうとして待っておられる. ただ神のみがわたしたちを助けることができになるのであって、人類がその神に近づくのを見ようとして見守っておられる. 神は彼らの罪を赦し、彼らを御自身のものとして受け入れることを切望しておられる. 神は、御もとに来るすべての悔いた魂を受け入れてくださる. なぜなら、この働きを成し遂げるためにこそ、神はそのひとり子に油を注がれたのである.

「しかし、なぜキリストはイザヤに記されたその言葉を最後まで読み終えられなかったのであろうか。なぜ『われわれの神の復讐の日』という句を省かれたのであろうか。この文の後半部も、前半と同じくまぎれもない真理であった。しかもキリストは、ご自分が選ばれた預言者に与えられたみことばの一部を差し控えられたからといって、その沈黙によって真理を否定されたのではなかった。しかし、この最後の句こそ、彼の聞き手たちがことさらに心に向け、また、自分たちの宗教的信仰に属さないすべての者に対してさばきを宣告することによって、実際に行おうとしがちであったところのものであった。彼らは、人々に真理と義と赦しの言葉を与える代わりに、神は異教世界のすべてを憎んでおられると教えていた。神の父なるご性質は誤って伝えられ、人間の言い伝えの下に埋もれさせられていた。Signs of the Times, January 14, 1897.」

「この時代における神の民の使命は、メシアの働きを描写する靈感の言葉のうちに示されている。『主なる神の霊がわたしの上にある。主がわたしに油を注がれたのは、柔和な者に良き知らせを告げ知らせるためである。主はわたしを遣わして、心の打ち砕かれた者をいやし、捕らわれ人に解放を、縛られている者に獄の開放を告げ、主の恵みの年と、われらの神の復讐の日を宣べ伝え、すべての悲しむ者を慰め、シオンにあって悲しむ者たちに報い、灰に代えて冠を、悲しみに代えて喜びの油を、憂いの霊に代えて賛美の衣を与えるためである。彼らは義の樅の木、主の植えられたものと呼ばれ、主が栄光をお受けになるためである。』」

「彼らは昔の荒れ廃れた所を建て直し、先の荒廃を興し、代々にわたる荒廃のために廃墟となった町々を修復するであろう。」『Lake Union Herald』1908年11月11日。

第三の災いにおける第二の災いの反復へとさらに進む前に、私たちは、この使命が「ここに少し、あそこに少し」を積み重ねることによって理解されるべきであることを、あらためて心に留めるべきである。これは、日曜法の文脈に適合する靈感の言葉のあらゆる「時」「日」「月」および「年」が、日曜法に打撃を与えるイスラムの備えにもまた適用されるべきであることを示している。

一例を挙げれば、「時」という語は旧約聖書のうちただ一つの書にしか見いだされず、その書とはダニエル書である。ダニエル書において「時」は五回言及されている。

ひれ伏して拝まない者は、だれでもその時ただちに、燃えさかる火の炉のただ中に投げ込まれる。…もし今、角笛、笛、琴、三角琴、十弦の琴、風笛、およびあらゆる種類の楽器の音を聞く時に、わたしの造った像の前にひれ伏して拝む用意があるなら、それでよい。だが、もし拝まないなら、その時ただちに、燃えさかる火の炉のただ中に投げ込まれる。おまえたちをわたしの手から救い出す神とは、いったいだれなのか。ダニエル 3:6, 15.

ホワイト姉妹は繰り返しダニエル書第3章を、したがって「同じ時」を日曜法に適用している。ダニエル書第4章において、ダニエルはネブカドネツアルに下る来たるべきさばきを説明しようとして苦闘する中、「一時」のあいだ当惑している。

そのとき、ベルテシャザルという名のダニエルは、一時のあいだ驚きのあまり茫然とし、その思いに悩まされた。王は語って言った、「ベルテシャザルよ、その夢も、そ

の解き明かしも、おまえを悩ませてはならない。」ベルテシャザルは答えて言った、「わが主よ、その夢があなたを憎む者たちに臨み、その解き明かしがあなたの敵たちに及びますように。」ダニエル4:19.

ダニエルは、来たるべき裁きをネブカドネザルにどのように告知知らせるべきかを理解しようとして、「一時」驚き惑った。ダニエルは、裁きの「時」が来たと宣言する第一天使の使者を表している。彼の予告はネブカドネザルに与えられ、そして一年後、バビロンに対する裁きがネブカドネザルの上にもたらされた。

その同じ時、このことがネブカデネザルの上に成就した。彼は人々の中から追い出され、牛のように草を食べ、その身は天の露にぬれ、ついにはその髪は鷲の羽のように、その爪は鳥の爪のようになった。ダニエル 4:33.

ダニエルは、ほどなく到来する日曜法を予告しており、それが到来する時、それはバビロンに対する裁きの「時」である。両方の「時」は、日曜法、すなわち大地震の時を指し示している。ネブカドネザルはバビロンの物語におけるアルファであり、ベルシャザルはそのオメガであって、壁に手の書き記したものが現れたまさにその夜に、ベルシャザルは殺された。

その同じ時、ひとりの人の手の指が現れ、王宮の壁の漆喰の上、燭台の向かい側に文字を書いた。王は、その文字を書く手の部分を見た。ダニエル 5:5

「まさにその時」、壁の上にその文字が現れたということは、書かれた日曜法が、日曜法において教会と国家の分離という「壁」を打ち壊す時を示しており、その時バビロンが終焉を迎えたように、聖書預言における第六の王国としてのアメリカ合衆国も終わるのである。第六の王国として、アメリカ合衆国は、イザヤ書二十三章においてツロの淫婦が忘れられる間、象徴的な七十年のあいだ支配する勢力である。イザヤが言及する王国あるいは王とは七十年の日々のことであり、聖書預言において七十年間支配した王国はバビロンであった。ベルシャザルのバビロンの陥落は、日曜法におけるアメリカ合衆国の陥落を予表しており、そこで壁に書かれた文字は、黙示録十三章の竜のように語ることに一致している。

黙示録第十八章において、バビロンに対する裁きは、第二の声がその裁きが一時のうちに、また一日のうちに来ると示す第四節の安息日法において始まる。

また、わたしは天からの別の声がこう言うのを聞いた。「わが民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからないためであり、また彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで積み上がり、神はその不義を覚えておられるからである。彼女が報いたとおりに彼女に報い、彼女の行いに応じて二倍にして彼女に返しなさい。彼女が満たした杯に、二倍にして彼女のために満たしなさい。彼女が自らを誇り、奢って暮らしたその分だけ、彼女に苦しみと悲しみを与えなさい。彼女は心の中で、『わたしは女王として座しており、やもめではない。悲しみを見ることは決してない』と言っているからである。それゆえ、彼女の災いは一日のうちに来る。すなわち、死と悲しみと飢饉である。彼女は火で焼き尽くされる。彼女をさばく主なる神は力強いからである。彼女と姦淫を行い、彼女とともに奢って暮らした地の王たちは、彼女が焼かれる煙を見ると、彼女のために泣き、嘆き悲しむ。彼らはその苦しみを恐れて遠く離れ

て立ち、こう言う。『ああ、ああ、大いなる都バビロン、力ある都よ、おまえへのさばきは一時のうちに来た。』」黙示録 18:4-10.

明らかに、バビロンに対する漸進的な裁きは、第4節の日曜法において、神のほかの羊の群れがバビロンから呼び出される時に始まる。ヨハネは、彼女の裁きの時を「日」とも「時」とも示しており、それによって、これらの時の象徴は象徴的に理解されるべきであることを確証している。

過越は第一の月に守られるべきものであり、過越は十字架に対応し、十字架はさらに日曜法に対応する。

主はエジプトの地でモーセとアロンに告げて言われた、「この月はあなたがたにとって月々の初めであり、あなたがたにとって一年の最初の月となる。イスラエルの全会衆に告げて言いなさい。この月の十日に、各人は父祖の家に従って、それぞれ羊一頭を取らなければならない。すなわち、一家に一頭の羊である。もしその家が羊一頭に対して人数が少なすぎるなら、その者とその家の隣人とが、人数に応じてこれを取らなければならない。おのおのその食べる分量に応じて、その羊を数えなければならない。あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。これを羊の群れ、あるいは山羊の群れの中から取らなければならない。そしてこの同じ月の十四日までそれを取り置き、イスラエルの会衆の全会衆は夕暮れにこれをほふらなければならない。出エジプト記 12:1-6.

過越はペンテコステの季節の始まりであり、それゆえにペンテコステを予表している。そしてペンテコステは、ひるがえって日曜法と一致する。幕屋は第一の月の第一日に建てられたが、これは、日曜法において勝利した教会が旗印として立て上げられることを予表している。第二の災いの「時」「日」「月」「年」は日曜法を示しており、また文脈が一致するところでは、重ねて与えられる預言の各線において、それら時間の表現はそれぞれ日曜法と符合する。日曜法において、教皇制による迫害の第二の期間が始まるのであり、第一の期間とは一二六〇年のことであって、その期間の殉教者たちは第五の封印の中で、「いつまでですか」との問いをもって主に叫び、教皇権が裁かれる時を待ち望んだ。教皇制による第二の流血の迫害において、イエスは御自分の民に対し、迫害されるとき何を語るべきかについて思い煩う必要はないことを告げておられる。

しかし、人々があなたがたを引いて行って引き渡すときには、何を語ろうかと前もって思い煩ってはならず、あらかじめ考え定めてもならない。ただ、その時にあなたがたに与えられることを語りなさい。語るのはあなたがたではなく、聖霊である。マルコ 13:11.

第一の禍において、人々は百五十年のあいだ苦しめられた。その年月は1299年7月27日に始まり、1449年7月27日に終わった。その時、四人の御使いが、時と日と月と年とのために備えられていて、人類の三分の一を殺すための四つの風を放ったのである。この苦しみの期間は、合衆国において獣の像が打ち立てられる期間を表している。その期間とは、レビ記二十三章においてラツパの祭りからペンテコステまでとして表される十五日間である。獣の像の形成の期間は9/11から日曜法に至るまでであるが、真夜中の叫びの使命の宣布の期間は、9/11から日曜法に至る獣の像形成のフラクタルである。

印を押す働きの始まりと終わりはまた、獣の像の形成におけるアルファでありオメガでもある。一方の階級は神の印のための品性を形成し、他方は獣の像を形成している。合衆国におけるその期間は、日曜法に始まる世界における同じ期間と一致している。「一か月」は、像の設置を強いる苦悩の象徴である。したがって、黙示録第九章十五節によって表される日曜法におけるその一か月は、世界において獣の像が設置される間のイスラムによる苦悩をも表している。

第二の災いの預言と、その時、日、月、年が、日曜法および合衆国を打つためのイスラムの解放をいかに表しているかについては、ほかにも預言的適用があるが、われわれはさらに別の論点へ進まなければならない。

ここ最近の時期、すなわちこの六か月ほどの間、私は、三つの禍としてのイスラムが預言的に三天使と結び付けられていることを強調してきた。ヤコブが終わりの日についてユダを「ぶどうの木」、その木に結び付けられるものを「ろば」とする予告から、キリストが御自身の凱旋入城に先立ってそのろばを解き放たれたことに至るまで、またその他の系統の証拠においても、第一および第二の禍としてのイスラムは、第一天使および第二天使の使命に力を与えた預言的メッセージを表しており、第三の禍としてのイスラムは、第三天使の預言的メッセージを表している。

最近、A・T・ジョーンズによって書かれた書物の一章が参照されたが、それは同じ事実を、しかし異なるアプローチから示している。ジョーンズは、黙示録の文法と構造を用いて、最後の三つの禍いのラッパを三天使の使命から切り離すことが不可能であることを示している。彼は、第一の天使を第二の天使から切り離すことはできず、また第三の天使も先の二つから切り離すことはできないことを強調している。ジョーンズの焦点は三天使に置かれており、彼は三天使の不可分の関係について自らの論証を展開しているが、まさに同じ論理によって、黙示録九章のラッパもまた、黙示録十四章の三天使から切り離すことができないことを証明している。私たちはこの論文を、ジョーンズのその章をもって締めくくりにする。

第十一章 第三天使の使命

今日のあの重要な問い、「われわれは何をなすべきか」に対する答えは、七つのラッパと今日の大国の位置とに基づいて、確信をもって与えることができる。なぜなら、その答えは、まさにこの基盤の上に、神の御言葉によって与えられているからである。

「七つのラッパのうち最後の三つには、三つの禍いが分かちがたく結び付いていることを、私たちは見てきた。七つのラッパのちょうど中ほど、すなわち第四のラッパの終わりの後、第五のラッパの始まりの前に、次のように記されている。『また私は見た。そして、一人の御使いが天の中空を飛ぶのを聞いた。その御使いは大声で言った。「禍いだ、禍いだ、禍いだ。なほもラッパを吹こうとしている残りの三人の御使いのラッパの声のゆえに、地に住む者たちには禍いだ。」』黙示録 8:13。」

三つの禍いが七つのラッパのうち最後の三つと不可分に結び付けられており、それぞれが一つずつ対応していることは、第五の御使いの吹奏が終わったときに、「第一の

禍いは過ぎ去った。見よ、この後なお二つの禍いが来る」と記されている事実によって、いささかの疑問も残さぬほど明白である。黙示録 9:12。また、第六のラツパが終わったときには、「第二の禍いは過ぎ去った。見よ、第三の禍いがすぐに来る。……第七の御使いがラツパを吹き鳴らした」と記されている。黙示録 11:15。

さて、七つのラツパの最後の三つと不可分に結びついている三つの災いの到来を告げ知らせるこの御使いと、切り離すことのできない関係にあるのが、黙示録14章の「第三の御使い」である。

「これがまた、いささかの疑いもなく確実であることが明らかにされるために、黙示録14章の第三天使の使命から始めて、その直接の関連をその起源にまでさかのぼってたどることにしよう。

「第三天使」に関する記録における最初の言葉は、「また、第三の御使が彼らに続いた」である。黙示録 14:9。これは、第三天使が「続いた」先に、すでに前を進んでいた者たちがいたことを示している。

「では、直前の節を取り上げよう。『また、もうひとりの御使が続いた。』これは、この御使いに先立って、すでにひとりの御使がいたことを示している。この御使がそれに続くとき、それは『もうひとり』となるのである。」

「さて、第六節に立ち返りなさい。『また、私はもうひとりの御使を見た。』これもまた、先にひとりの御使が進み出ていたことを確証するものであり、それゆえ、この御使は天の中ほどを飛ぶとき、『もうひとりの』御使であるのである。」

「黙示録をさらにさかのぼって見ていくと、第十章第一節に至るまでは、第七のラツパの御使を除いて、いかなる御使も見いだされない。そこで私たちはこう読む。『また、私はもうひとりの力ある御使を見た。』この表現は、前と同様に、この者より前に一人の御使が存在することを証しており、この者が現れるとき、そのゆえに彼は『もうひとりの』と語られているのである。」

さらにさかのぼっていくと、第六および第五のラツパの御使たちを除いて、第八章の最後の節に至るまでは、いかなる御使も見いだされない。そして、そこにおいて私たちは根源的なものに到達する。というのは、こう記されているからである。『また私は見て、一人の御使の声を聞いた。』—『もうひとりの御使』ではなく、第一義的に、『一人の御使』である。

「このように、黙示録 8:13 に始まり、『もう一人の』という語によって結ばれた天使たちの切れ目ない連続が、彼の使命を携えた黙示録 14 章の第三天使に至るまで一直線に続いている。すなわち、次のとおりである。

「わたしは見た。また、一人の御使の声を聞いた。」黙示録 8:13。

「そして、わたしはもうひとりの強い御使を見た。」黙示録 10:1。

「また、わたしはもう一人の御使を見た。」黙示録 14:6。

「『また、もう一人の御使が続いた。』8節。」

「『そして、第三の御使いが彼らに続いた。』第9節。」

「おそらく次の簡潔な図は、七つのラッパのうち最後の三つに関わる三つの禍いを告げる天使と、黙示録14章の第三天使の使命との関連を明らかにする助けとなるであろう。

「第一のラッパ」黙示録 8:7

「第二のラッパ 黙示録 8:8」

「第三のラッパ 黙示録 8:10」

「第四のラッパ」黙示録 8:12

「ひとりの御使い」——わざわい、わざわい、わざわい。黙示録 8:13.

「第五のラッパ 黙示録 9:1-11／第一の災い」

「第六のラッパ」 黙示録9:13—11:13 第二の禍い 「もうひとりの力ある御使い。」
黙示録10:1

「第七のラッパ 黙示録11:13-19 第三の災い 『もうひとりの御使い』 黙示録14:6」

「また、ほかの御使いが続いて来た。」黙示録 14:6

「『第三の天使が彼らに続いた。』黙示録 14:9。」

「これらすべての意義は、第三天使の使命がそれ自体として実際には何であるかを考察することによって、いまやいっそう十分に理解されうる。『第三天使』という表現は、その字義の上から見ても、明らかに三人の天使から成る一連の系列における第三の天使を指している。すでに示したとおり、この三人の天使の系列は、それぞれが一つの使命を帯びているのであり、黙示録第十四章六一十二節に見いだされる。これら三人の天使の使命は互いに融合し、第三の使命において頂点に達するのであって、この使命は、地の収穫が熟して、主がそれを刈り取るために来られる備えが整う時に至るまで、鳴りやむことがない。」

「第三天使の使命」そのものは、第三天使の言葉において告げられているとおり、次のとおりである。『また、第三の天使が彼らに続いて来て、大声で言った。「もし、だれでも獣とその像とを拝み、その額またはその手にその刻印を受けるなら、その者もまた、神の憤りの杯に、混ぜものなしに注がれた神の御怒りのぶどう酒を飲むことになる。そして、聖なる御使いたちの前、および小羊の前で、火と硫黄とによって苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ち上る。また、獣とその像とを拝む者、またその名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。ここに、聖徒たちの忍耐がある。ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を保つ者たちがいる。』」

「これが、他の二つから切り離して見た場合の第三天使の使命である。だが、実際には、それを別個のものとみなすことはできない。また、それだけが世に対する単独の、独立した使命であるかのように、他から切り離して立たせることもできない。というのは、それについてのまさに最初の言葉が、『第三の天使は彼らに続いた』だからである。かくして、この使命そのものの最初の言葉によって、私たちはただ一つでは

なく、それに先立った二つのものへと指し示されるのである。そして、「続いた」と訳されているギリシア語は、離れて後に従うこと、あるいは単に後に続くことだけを意味するのではなく、「共に従う」ことを意味する。すなわち、兵士たちがその隊長に従うように、あるいは僕たちがその主人に従うように従うことである。したがって、それは「ある事柄において人に従うこと、自らを導かれるままに任せること」を意味する。事物について語られるときには、それは結果として続くこと、すなわち「先に起こった何かの結果として」続くことを意味する。ゆえに、人に関して言えば、第三天使は先行した二つのものと共に従うのであり、その使命は、一つの事柄として、先に行ったものの結果、すなわち帰結として続くのである。」

「しかし、第二のものについてもまた、『そして、もうひとりの御使いがこれに続いた』と書かれている。第三の御使いが第二の御使いに続くのと同様に、第二の御使いも第一の御使いに続くのである。そして第一のものについては、『また私は、もうひとりの御使いが飛ぶのを見た』云々と書かれている。これがこの三つの系列のうちの最初のものである。これに続いて、もうひとりが現れる。そして第三の御使いが彼らに続く。彼らの出現の順序には継起がある。しかし、この三者が順次に現れたとき、彼らはその後、一つとなって共に進むのである。第一のものがその使命を発し、第二のものがそれに続いて第一のものに加わる。第三のものが彼らに続き、そして彼らに加わる。こうして、この三者が結び合わされ、その結合した力のうちに共に進むとき、彼らは力強い、三重の、大声のメッセージを形づくるのである。第三天使の使命を完全なものとするには、そのすべてが必要である。そして、第三天使の使命は、そのすべてが語られるのでなければ、真に伝えられることはあり得ないのである。」

「では、その三重の使命は、それぞれの部分において何であるのか。——ここに第一のものがある。『またわたしは、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地に住む者たち、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った、「神を恐れ、神に栄光を帰せよ。神の裁きの時が来たからである。天と地と海と水の源とを造られた方を礼拝せよ。」』

「ここに第二のものがある。『また、もうひとりの御使いが続いて言った。大いなる都バビロンは倒れた、倒れた。なぜなら、彼女はその淫行の憤りのぶどう酒を、すべての国々に飲ませたからである。』」

「そして、ここに第三のものがある。『また、第三の御使いが彼らに続いて来て、大声で言った。だれでも、獣とその像とを拝み、その額に、あるいはその手に、その刻印を受けるなら、その者もまた、神の憤りのぶどう酒、すなわちその怒りの杯に混じりけなく注がれたものを飲むことになる。そして、その者は、聖なる御使いたちの前、また小羊の前で、火と硫黄とによって苦しめられる。その苦しみの煙は、世々限りなく立ち上る。そして、獣とその像とを拝む者、またその名の刻印を受ける者は、昼も夜も安息を得ない。ここに聖徒たちの忍耐がある。ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を保つ者たちがいる。』」

これらの各使命の文言に一目を注げば、ギリシア語の「続いた」という語のうちに、「結果として続く」という思想が含まれていることがわかる。第一の天使は永遠の福音を携え、すべての被造物に宣べ伝え、すべての者に、神を畏れ、神に栄光を帰し、神を礼拝するよう呼びかける。なぜなら、神のさばきの時が来たからである。この使命

が拒まれることによって、まさにその拒絶の結果として生じる事態が、続いて現れる第二の天使の言葉のうちに描写されている。そして、第一の使命の拒絶のゆえに、また、第二の天使において告げられているその拒絶の結果のゆえに、さらにその結果として、第三の天使が彼らに続き、第一の使命の拒絶という二重の結果として生じた恐るべき害悪に対する、その恐ろしい警告を大声で宣べ告げることを必要とするような事態が生じるのである。

「そして、第三天使の声と働きとが第一天使のそれと一つに溶け合っていることは、その結びの言葉から明らかである。すなわち、『ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を保つ者たちがいる。』という言葉である。なぜなら、これは永遠の福音の宣教が常に目指すところだからである。これは、神を恐れ、神に栄光を帰し、また『天と地と海と水の源とを創造した方』を礼拝することの本質である。神の戒めを守り、イエスの信仰を保つことだけが、第一天使が『そのさばきの時が来た』と宣言するその審判の時に、あらゆる魂を立たせうる唯一のものである。」

第三天使の結びの言葉にすぐ続いて、「また、わたしは天からの声がこう言うのを聞いた、『書き記せ。今から後、主にあつて死ぬ死人は幸いである』」—すなわち、この時から後である。黙示録 14:13. さらにその直後に、次の言葉がある。「また見ていると、見よ、白い雲があり、その雲の上に人の子のような方が座しておられ、頭には金の冠をいただき、手には鋭い鎌を持っておられた。また、もうひとりの御使いが神殿から出て来て、雲の上に座しておられる方に大声で叫んで言った、『あなたの鎌を入れて刈り取ってください。刈り入れる時が来ました。地の穀物は実っているからです』。そこで、雲の上に座しておられる方は、その鎌を地に入れられた。すると地は刈り取られた。」黙示録 14:14-16. そして、「刈り入れは世の終りである。」マタイ 13:39.

「さらに、第三の天使は、獣とその像が何であれ、その礼拝に対してすべての人々に特に警告している。そして、黙示録 19:11-21 から、主が天の雲に乗って来られるとき、獣とその像は『生きて』おり、主の来臨の輝きによって『両者とも』滅ぼされることが分かる。

「これらの事実は、第三天使の使命が、力強い三重の大声による使命であり、主の再臨の直前に、あらゆる国民、部族、言語、民族に向かって発せられるものであることを示している。そしてそれは地の収穫を熟させ、バプテスマのヨハネの使命が主の初臨のための道を備えたのと同じように、主のために備えられた民を整えるのである。したがって、これは世に対する神の最後の、終結的な使命なのである。

「さて、このように第三天使の使命そのものについての理解を得た今、現代の大国諸国に対するその使命の関係は、『第三天使の使命の時』を考察することによって、より明瞭に識別され得る。」A. T. Jones, *The Great Nations of Today*, 114.